

土
37
102 7
号 頁

土木学会誌第三十七巻総目次

会 長 講 演	電 源 開 発 について	会 長	工 博	大 西 英 一	6	1
採 摺	土木学会誌の使命	編 集 委 員 長	工 博	本 間 仁	1	1
講 演	欧米紀行	正 員		板 橋 三 郎	1	2
報 文	国鉄小千谷発電所工事について	正 員		藤 井 松 太 郎	1	5
	長柱の弾性挫屈について	正 員	工 博	岡 本 舜 三	1	16
	鋼道路橋の鉄筋コンクリート連続梁の設計用 曲げモーメントについて(2)	正 員 准 員		成 岡 昌 夫 米 沢 博	1	17
	セメントペーストの癒着について	准 員		村 田 二 郎	1	22
	Pre-Stressed Concrete の収縮とクリープについて	正 員		岡 田 清	1	25
	砂濃過の水理に関する一基礎的研究	准 員		合 田 健	1	29
	気泡管の感度について	准 員		北 郷 繁	1	33
	アメリカの洪水調節と河川流域処理	正 員 正 員 正 員		目 黒 清 雄 山 本 三 一 山 内 一 郎	2	1
	両総用水第 20 号隧道圧気工法について	正 員		加 納 倫 二	2	6
	自由境界を有する非定常滲透流について	正 員		内 田 茂 男	2	10
✓	現地における地盤透水係数の一測定法	正 員 准 員 准 員		松 尾 新 一 郎 赤 井 浩 一 郎 池 田 一 郎	2	14
	軽量コンクリートについて	正 員	工 博	篠 原 謹 爾	2	19
✓	突合せ溶接継手の許容応力について	正 員 准 員	工 博	小 西 一 郎 西 村 昭	2	22
	巾の拡がる水路に関する実験	准 員		嶋 祐 之	2	26
	米国に於ける土質力学研究の現況	正 員	工 博	最 上 武 雄	3	1
	河口港の諸問題について	正 員		渡 部 彌 作	3	5
	国鉄瀬田川橋梁橋脚の振動測定	正 員 正 員 准 員	工 博	小 西 一 郎 畑 中 弘 男 後 藤 尚 男	3	10
	トランシット及びレベルの気泡管感度数について	准 員		北 郷 繁	3	14
	最近の単価による高架線の経済的形式	正 員		坂 元 左 馬 太	3	17
	砂濃過における損失水頭および圧力水頭の計算について	准 員		合 田 健	3	22
	塑性図に示される土のコンシステンシーの特性について	正 員		松 尾 新 一 郎	3	26
	公共土木施設災害復旧事業費国庫負担法について	正 員		坂 井 秀 正	4	1
	レール応力の計算に関する一考察	正 員		最 上 幸 夫	4	5
	暗渠内の水流について	准 員		粟 津 清 蔵	4	9
	跨線道路橋宮城野橋の強度判定	准 員		橋 本 香 文 伊 藤 一 人	4	13
	鉄筋コンクリート単純版の剪断力に対する 輪荷重の分布有効巾に関する研究	正 員 准 員		成 岡 昌 夫 米 沢 博	4	17
	国有鉄道信濃川小千谷発電所の水槽について	正 員		上 田 健 太 郎	5	1
	測角の1つの誤差について	准 員		北 郷 繁	5	6
	電車荷重によるレールの衝撃応力に関する実験的研究	正 員 准 員 "		小 後 三 林 尚 利 藤 輪 勇 男	5	10

鋼道路橋鉄筋コンクリート片持版の剪断力に

に対する荷重分布有効巾に関する研究……………	准員	末 沢 博	5	15
弾性支承上にある有限長梁が集中荷重を受ける 場合の解法とその機械的計算法の提案……………	正員	栗 田 元 良	5	20
土の粘弾性について……………	正員 准員 ”	工博 村 山 朔 片 山 重 天 野 光	5	27
河川の洪水流量について (続)……………	正員	工博 鶴 見 一 之	6	3
乾燥砂中への水の滲透について……………	正員	内 田 一 郎	6	9
三池炭鉱に於ける人工島工事について……………	正員	森 田 定 市	6	12
国鉄信濃川発電真人沢水路橋について……………	准員	金 塚 弘	7	1
トランシットの外焦式望遠鏡における水平 視線の調整について……………	正員	森 吉 滿 助	7	6
堰堤内部応力の算定について……………	正員	片 羽 義 次	7	11
曲梁の剪断応力度及び半径方向の垂直応力度に対する新公式…	正員	大 野 謙 諫	7	18
土の粒度分析における化学的分散処理について……………	准員	山 内 豊 聰	7	24
曲梁の垂直応力度並びに弾性重量の公式について……………	正員	大 野 謙 諫	8	1
現場コンクリートの強度試験に必要な供試体の 箇數決定について……………	准員	伊 藤 和 幸	8	7
九州産火山灰類の利用に関する基礎的研究……………	正員	工博 藤 原 謙 爾	8	13
静水中における砂粒子の沈殿に関する一実験考察……………	准員	徳 平 淳	8	17
三池炭鉱における人工島の沈下について……………	正員	森 田 定 市	8	21
橋梁床組の計算について……………	正員	星 治 雄	8	25
尼崎港の防潮堤について……………	正員	佐 藤 肇	9	1
鋼構造におけるラーメン隅角部の設計公式について……………	正員	大 野 謙 諫	9	7
プレストレストコンクリート逆T型桁を用いた 合成床版橋の設計について……………	正員	洞 庭 謙	9	11
地盤の応力集中係數に関する一考察……………	准員	赤 井 浩 一	9	15
土堰堤の振動に関する3次元的研究……………	正員	畑 中 元 弘	10	1
道路側溝に関する水理学的研究……………	准員	石 原 安 雄	10	5
浸透水流による築堤斜面の崩壊について……………	正員	久 保 田 敬 一	10	12
フレンデル桁の一解法……………	正員	川 上 暢 夫	10	16
プレストレストコンクリート桁の曲げ疲労についての実験…	正員	猪 股 俊 司	10	21
洪水の週期変動について……………	准員	上 山 惟 康	11	1
年最大洪水流量の長期予報について……………	正員 准員	工博 石 原 藤 次 郎 上 山 惟 康	11	7
土の電気伝導について……………	准員	森 麟	11	13
上下流の水位差に比し巾の狭い矩形断面堤体の滲透……………	正員	田 中 茂	11	17
鋼道路橋鉄筋コンクリート連続版の剪断力について……………	正員	成 岡 昌 夫	11	22
不完全弾性柱の挫屈強について (要旨)……………	正員	工博 結 城 朝 恭	11	25
急斜面の土壌浸蝕量に関する一実験公式……………	正員	田 中 茂	12	1
現場コンクリートの強度試験に必要な供試体の個數について…	正員	赤 野 俊 一	12	5
一様ならざる枕木沈下係數を有する軌道応力について……………	准員	若 林 正	12	11
急速砂濾過における濾過水頭に関する一実験考察……………	准員	徳 平 淳	12	15
平行放トラス橋の基本振動數について……………	正員 准員	工博 小 西 一 郎 山 田 善 一	12	19
鉄筋コンクリート不静定構造のクリープについて……………	正員	岡 田 清	12	23

寄 書

我国土木技術者の反省と将来.....	正員	須之内文雄	7	32
新制大学の教科課程について.....	正員 工博	本間仁	9	25
河域計画と道路網.....	正員 工博	岡本但夫	10	28
アメリカのダム行脚.....	正員 准員	佐藤志郎 近藤邦二	12	32

資 料

水中コンクリートのコアテストの一例.....	正員 正員	松本有彦 丹原和	2	34
米開拓局訓練規程について.....	編 集 部		2	35
土質基礎工学会の最近の動き.....	正員 工博	星 稔 和	2	36
試作せる電気抵抗線歪計用歪指示器及び切換調整装置に ついて.....	正員 准員	成岡昌夫 米沢夫博	3	33
ワイヤーストレインゲージのコンクリートへの応用.....	正員 准員	川口輝夫 岩井徳雄	4	26
鶴見・川崎臨海工業の現況.....	准員	菅野一	5	36
ケイ酸ナトリウム結晶の作り方について.....	正員 准員	松尾新一 三瀬貞	5	40
有料道路について.....	浅 村 廉		6	20
ブルドーザー、キャリオールの施工歩掛りについて.....	正員	伊丹康夫	6	21
ダム設計、施工についての質問に対する J.L. Savage 博士の回答.....	正員	佐藤志郎	7	35
モルタルT形ばりの一実験.....	准員 准員	桑原宏郎 小寺重	8	36
河床流砂量研究の最近の傾向.....	正員	久宝保	8	38
米国の土工施工の示方及びプラクティス.....	正員	白石俊多	9	27
新道路法について.....	浅 村 廉		10	32
電気抵抗線歪計用接着剤について.....	正員 工博	成岡昌夫 辻和一郎	11	30
梁の撓みに関するモールの定理の拡張について.....	正員	近藤繁人	11	31
鋼鉄道橋電弧溶接工事示方書の制定について.....	国鉄施設局特殊設計室		12	37

抄 録

取入水路の除砂装置.....			2	38
コンクリート舗装の耐久性に関する長期試験.....			2	39
Grand Coulee Dam にある世界最大のポンプ場が運転を開始.....			2	40
AE コンクリートの空気量におよぼす温度とセメント表面積の影響.....			3	37
足場を用いないプレストレストコンクリート橋の架設法.....			3	38
ミシシッピ下流の洪水予報.....			4	30
鉄筋コンクリートにおける鉄筋の引張力と付着力の分布の測定.....			4	31
実験室試験による盛土材料の締固め調整.....			4	33
洪水頻度算出方法の展望.....			5	41
どういふわけで、小さな工事ではコンクリートが悪くなり勝ちなのか.....			5	42
シルトの注入による漏水防止工.....			6	27
Denver 市への給水用ダム工事.....			6	27
鉋桁のねじり.....			8	41
30 in 管路の埋戻しについて.....			8	42
スカンヂナヴィアの都市給水.....			9	32
コンクリートの性質に与える CaCl ₂ の効果と影響.....			9	33
鉄筋コンクリートはりの強度及び安全率.....			11	33
ボニー貯水池で捨石工にアスファルト・コンクリートとソイル・セメントを代用した.....			12	39

講 座

コンクリート・ダム特論Ⅴ—アーチダム……………	正員 工博 垣谷正道	1	38
コンクリート・ダム特論Ⅵ—ダムの溢流について……………	正員 村幸雄	2	42
海岸侵蝕……………	正員 京坂元宇	3	40
道路工学特論Ⅰ—総論—道路輸送と道路技術の諸問題……………	正員 工博 星 埜 和	4	35
道路工学特論Ⅱ—道路計画について……………	正員 片平信貴	5	43
道路工学特論Ⅲ—道路の構造とその規格について……………	正員 浅井新一郎	6	29
道路工学特論Ⅳ—材料試験並びに施工試験……………	正員 工博 谷藤正三	7	37
道路工学特論Ⅴ—道路工事の実施……………	正員 高野 務	8	43
土木推計学Ⅰ—推計学の理解と応用……………	伊大知 良太郎	9	35
土木推計学Ⅱ—推計学のねらいと本質（前篇）……………	正員 田原保二	10	36
土木推計学Ⅲ—推計学のねらいと本質（後篇）……………	正員 田原保二	11	36
土木推計学Ⅳ—土木工学における実験計画……………	正員 工博 岩井重久	12	40

 挨 拶

土 木 学 会 誌 の 使 命

編集委員長 本 間 仁

戦争が終つてから既に7年目を迎えて、我が学会誌もようやく日本の土木学会誌として恥かしからぬ内容外観を備えて来たことは誠に喜びにたえない。私はこの年頭に當つて、学会誌の使命は何か、従つて学会誌は如何に發展すべきかについて私見を述べたいと思う。

学会誌には次の2つの大きな使命があることは一般に認めて戴けるものと思う。その第1は会員の創作論文又は報告 (Original papers) の発表機関たることである。我国土木工学の分野での新しい研究、新しく得られた調査資料などを公開し、土木工学に絶えざる進歩の印をつけ加えて行くことであつて、之は世界各国の学会誌によつて夫々に行われ、その間の交流によつて我国の学会を国際的なものとなすと共に、世界の土木工学の發展にも寄与することが出来るのである。

学会誌は土木学会の行つている最大の事業であり、全国の会員は之を通して絶えず学会との連繫を保ち、又広く土木工学界全般の情勢をもうかがうことが出来るのである。従つて学会誌の第2の使命は全会員に出来るだけ広く土木工学界各分野の情勢を伝え、又会員の参考となるべき各種の資料を有効に整理して提供することである。

現在土木学会誌としてはこの第1の使命に対しては報文欄及び不定期の論文集をあて、第2の使命のために資料、抄録、ニュース、講座などの欄を設けている。然しこの中の報文欄に対しては何時の時代にも会員諸氏からの批判があり、その批判は要するにむづかしくてわかり難い論文が多過ぎると言うことが大多数である。現在では経済的な事情から報文の頁数をかなり制限し、問題がやゝ特殊で難解なもの、或いはどうしても頁数がかかり多くなるものを論文集の方にまわして、会誌の報文は出来るだけ一般性を持つた、しかもあまり長くならないものに限つている。之で学会誌の方は大分読み易いものとなつていゝと思うが、論文集の処置にはなほ問題があつて、実費配布と言う制度は良いものとは考えられないので、この配布方法には更に研究を加えたいと思つてゐる。然し一方に於て特殊で難解な論文を論文集にまわすと言つても、土木工学に關聯のあまり薄いものは採ることが出来ないであつて、たとえそれが会員の力作であり、天才的な論文であつても御断りしなければならない。

一般会員の参考に供すべき資料、ニュースなどについては編集上にも相当の技術を要して、之等を充実させるためには編集事務局の強化も必要ではないかと思う。アメリカの土木学会 (A.S.C.E.) では論文及び討議をのせる Proceedings of A.S.C.E. の他に、会員の啓発のための雑誌 Civil Engineering を発行している。このようなことが出来るようになれば2つの方面に対して編集機関が別に設けられるようになり、夫々に格段の進歩が期待出来ると思う。然し我国の現状では薄い学会誌をこれ以上に分けることは困難であるから、しばらくは少い紙数の中で有効に使つて行くことを考えるべきであらう。編集部としては之等の点につき会員の声を聞けることを望んでいる。

最後に重ねて言いたいことは、学会誌は学会としての重要な仕事であつて会員諸氏が之に深い関心を持たれることを望んでいる。又学会誌を通じて日本の土木学会が国際的な学会となるために、会員諸氏が心からなる支持を会誌に対して寄せられることを期待するものである。経済的な諸事情が少しづつでも好転して来るならば、学会誌も又次第に改善されて来ることであらうが、編集委員会としては常に会員から離れた会誌とならぬよう出来るだけの努力を続けて理想的なしかも我国としての一つの特徴を備えた学会誌の出現のために尽したい考えである。